

Title	都市・農村問題の現在と将来
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.2 (1946. 8) ,p.119(1)- 144(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19460800-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19460800-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

野村兼太郎 著

隨筆 文化建設

B 六判 四〇四頁 三〇圓

高橋誠一郎 著

經濟原論

A 五判 三八二頁 三十圓

竹中久七 著

中國戰後の政治・經濟

B 六判 一七〇頁 十五圓

民法大要

A 五判 一七〇頁 二十圓

昆野和七 校編校

福澤諭吉「女子教育論」

B 六判 一二八頁 十三圓

キヤナン版翻刻(第一卷)

アダム・スミス「國富論」

A 五判 三三〇頁 三十五圓

三田 慶應出版社

都市・農村問題の現在と將來

奥井復太郎

はしき

本誌編輯者は「都市と農村の對立と其の克服」なる課題の下に拙稿を求められた。此の課題は遠く昔の都市・農村論に溯及するまでもなく、現代的問題として既に相當永く久しい問題であり其の解決と克服とは未到のものであつた。勿論此の課題を廻る幾多の論者中或ひは其の對立を峻鋭に説く者もあり、或は單なる對照となす者もあり、實に其の支配關係を指摘する者、一步を進めて都市農村の兩者に對する批判賛否等々議論の岐れるところ決して尠くはない。故に此の課題は學界の問題として陳腐に屬するとは云へ未解決問題たるを失はぬ。併し編輯者が今日此の機會に此の問題を再提出された事には更に一應の理由あるものと解してよろしからう。其の理由の解明は「此の機會」の分析に求められる。

云ふ迄もなく我國に於ける都市・農村關係は戰時殊に現在に於て舊來に見ざる特殊な關係、云はゞ從來から見れば價值倒錯とも云ふ可き狀態に立到つてゐることが其の一つの理由であり、も一つ理由は全面に亘る日本民主化の必要に迫られた此の機會に兩者との對立を克服すべき何等かの機縁が見出さるゝにあらざるかとの豫測である。

第一の理由は殊に現在敗戦日本の直面してゐる未曾有の經濟・生活危機が深刻極まりないもの丈けに敢て證明の必要もない位、明白な

都市・農村問題の現在と將來

事實として觀ぜられてゐる。都市疎開の實狀、現在の食糧備在等からして農村・農民を呪ふ聲が都市に喧しいと同時に、依然として都會的生活の浮華を囃ふ地方の非難。前述した都市・農村關係の倒錯がある丈に此の現狀は理論を超越した論議が紛々として起きる。第二の理由も此の現狀を承けて其の緊要度が高まること云ふ迄もない。

茲に筆者は本稿の企圖を「都市・農村問題の現在及び將來」とした所以がある。即ち此の問題の現在と將來とは正さに編輯者の課題理由の時間的表現に外ならぬからである。

一 都市・農村の相互關係

都市・農村の相互關係は果して對立的關係であるか、それとも單なる對照的關係であるか。先づ此の問題が明かにせらるゝ必要がある。勿論、對立關係は當然對照關係を含んで來ると見ても差支なからうし（例へば勞働・資本の對立は勞働者と資本家との對照關係に其の一端を示すが如く）更に突き進んで云へば對照關係は對立關係があつての存在だとも云へるであらう。故に理論的には對照關係を對照的存在と丈に限つて了はないで更に其の奥に潜在する事由の解明を行ふ必要があり、さうすれば當然、兩者關係の對立有無の問題にまで發展して來ると考へられる。此の意味で都市・農村の相互關係に若干の考慮を拂つてみる。

對立とは元來同一目的に對して異つた態度を以つて其の達成を希求する關係であつて、此の目的が一つである場合に當然抗爭の關係が生れて來る。古來の武家政權の爭奪や現在の政黨的政權爭奪は正さにそれであつて、此の外勝敗を爭ふ關係にあるものはいづれも大なり小なり對立關係にある。運動競技等に於ても同じで兩々相對して下らずといふ表現に示さ

れる様に、對立のも一つの條件として好敵手——即ち抗爭能力の有無といふ事がつけ加つてゐる。一面、對立關係は既に述べた様に對立せる兩者間に互に異つた態度が持たれるといふ點から見ても、兩者が同質的でなく異質的だといふ條件も生れて來る。此の意味で保守と急進、獨裁と自由、封建と民主等は正しい對立關係にあるが武家政權の源平爭奪の如きは必ずしもさうした條件を具へてはゐない。運動競技の場合もさうであつて、唯、一つの目的を己が占めんとする抗爭關係に外ならない。むしろ武家對公卿、政黨對官僚といふ所に對立についての「異つた態度」といふ條件が具備せられてゐる。故に對立といふ事は同一目的達成の爲めに異つた態度を持つ抗爭能力者の相互的關係だといふ方が正しいかも知れない。

又普通よく勞資の對立といふ事が云はれる。之れは充分考へて見る必要がある。即ち經濟社會の、從つて全社會のヘゲモニーをとる事を根本目的として考へれば兩者は正さに對立的抗爭關係にあり、資本制原理に對して社會主義原理が抗爭するところに對立關係は明白になる。併しも一歩手前で考へると、資本と勞働との對立は本當の意味の對立にはなつて來ない。何故ならば資本にとつて勞働—賃勞働は自らの成立の爲めに必然的存在でありその成立基盤だからである。資本制社會は賃勞働の存在を否定して成立し得ない。故に此の場合否定せらるゝもの——對立抗爭に於いて——は賃勞働そのものでなく、賃勞働から離脱飛躍せんと企てる「新しき勞働」である。此の意味に於いて前述した様に資本制と社會主義の兩原理が對立するのである。資本制社會が單純に勞働に對立するものでない事は之によつて明かであらう。

二 都市と農村の對立

、しからば、前述した對立關係の正しい狀態は都市と農村との場合に於いてどうなつてゐるか。嘗て都市は農村を搾取するといふ言葉が流行した。併し前項に述べた様に搾取—奉仕を規定する關係だけでは對立にはならぬ。搾取せらるゝもの奉仕を規定されたものが之れを離脱して新しき姿に於いて抗争する精神と原理とが必要である。是等の觀點から見て來ると第一に都市と農村とが正しく對立關係に立つ爲めには、先づ第一に兩者が狙ふ同一の目的とは一體何であらうか。第二に兩者はどんな異つた態度を持つてゐるのかの二點が究明されねばならぬ。第三には都市對農村のさう云つた關係は元來本源的なものなのか、或ひは派生的現象的乃至は形態的のものなのか、是等の疑問について答へねばならぬ。

先づ第一の課題である、都市と農村とが狙ふ同一の目的とは何か。之れは勿論、政治的にも社會的にも經濟的にも或ひは是等凡てを綜合した所についても考へる事が出來よう。即ち政治・社會・經濟關係に於いて土地の關心と非土地的（資本的）關心との價值主張（從つて價值爭奪）であると云へよう。それは農業と工業の勢力抗争とも見る事が出來るであらう。經濟政策的に云へば農業立國と工業立國とは正しく對立關係にある。一國民經濟の指導權を農業態制の社會として握るか工業態制の社會として握るかの問題である。此の意味に於いて農村と都市が對立をする。

しかし都市が農村を搾取するといふ意味に於ては、そして其の段階にある限りに於いては都市と農村とは對立しない。むしろ都市は農村を大事にする。「百姓は殺さぬ様、生かさぬ様、心して取扱ふべし」と云はれてゐる様に都市の成立が農村の基盤の上に立つてゐる限り、都市はさうした農村を其の限度で大切にする。故に此の場合に於いても抗争的對立は農村が都市成立及び繁榮の基盤たる事から脱してその自律性を主張する時にのみ生ずる。

第二の課題たる都市及び農村は互にどんな異つた態度、體系を持つか。既に農村の土地の關心に對して都市の資本的關心、農村の農業態制に對して都市の工業態制を指摘した。此の異つた態度及び態制については擧げる可き箇條は頗る多く常に都市・農村關係の最も對照的なものとして各方面の注意を惹いてゐる所であり、茲に縷説する必要もなし、又後段、兩者の有様を對照せしむる時に之れに關説しよう。

然らば第三の課題、即ち都市及び農村の對立といふ事はそれ自體本源的なものなのか、或ひは派生的、現象的乃至は形態的のものなのかといふ疑問に對しては筆者は之れを本源的のものと考へ難いのである。都市が農村を搾取するといふ表現は一つの表現としては認められても本質的なものを言ひ現はした命題ではない。正しく云へば封建的支配制なり資本制的支配が本源的關係であつて、その結果として封建的都市と封建的農村、資本制的大都市と資本制的農村の現象及び形態が生れるのであつて、此の現象形態が表見的には極めて判然としてゐる爲めに、都市・農村關係の對立を本源的に表現しがちになるのである。

併し本來、本源的でなく現象・形態的のものである限り技術的な進歩や慧智を以て表現は或る程度まで變へる事が出來る。交通機關の發達や土木建築技術の發展は都市及び農村の形態或ひは空間的配置を或る程度まで在來のものから變更せしめる事が出來る。都市計畫や農村計畫はそれを擔當する技術であつて、大都市の改造や工業聚落の設計や農村聚落設計等は一應、形態的にも或ひは生活様式的にも兩者の所謂對立關係に何等かの緩和を生ぜしめたかの感を懷かせる。併し本源的對立關係、即ち資本の土地支配又はもつと正確に云ふならば土地勞働（工業勞働に對して）支配の關係は之れで消滅

するものではない。資本の低賃労働の利用は食糧農作物及び原料作物を生産する労働對價の低廉——従つて假りに都市労働者に文化的欲望を刺激して高収入を得んが爲めに労働意欲を煽りたてるにしても、いつでも最も低い限界生活水準にまで引き下げる事の出来る保證を農村に對しても持つ事になつてゐる。同時に安價な労働給源としての農村人口の豊富さも見逃す事は出来ない。そして此の場合、工業立地の經營計算へ立てば工場を大都市に置かうと地方へ分散せしめ様と、基本的關係には相違は無いのである。むしろ素朴な低賃銀労働の利用に立つてゐる資本制經營にあつては農村労働の封建性を有利に利用する意味で地方工場の進出は歓迎せらるゝかも知れない。

何となれば都市に對して可なり後進的な農村は、その行動を經濟的合理主義の線にまで進出せしむる事が困難であつて少なからざる因循と保守、郷土執着の缺陷を持つてゐる。それ故に郷土的なもの、家鄉的關係に對しては強い精神的愛着から、雇傭の、従つて労働對價の低廉を純粹労働的計算を外して受容する傾向が多分にある。彼等に最も現代的なプロレタリア的性格を期待するのは無理であつて、その非プロレタリア的性格が又、狙はれる所ともなる所以である。故に工場と地方分散を種々の方面から肯定し獎勵する論者の中に、既に此の點、つまり經營方針及び條件の劣惡を地方民の愛郷心によつて埋め合せ負擔轉嫁の恐ある事を指摘し工場地方分散に警告を發してゐる者あるは見逃せない。

斯くの如く、對立關係として都市對農村を見れば、それは本源的存在でなく現象的形態的であり、其の對照は極めて明瞭であつて、その爲めに兩者の對立が決定的のものであるかの觀を呈する。併し政治・經濟・社會の全域に亘つて農村、正しく云へば土地的關係が支配的地位を確立維持發展せしめんとすれば、都市、正しく云へば資本的關心に對して充分抗

爭的對立關係に立ち得るものである。敗戦日本の經濟立直しにかうした面が皆無でない事も考へられるかも知れない。

三 都市と農村の對照

對照關係として都市と農村とを見た場合、吾々は其の對照の豊富さに驚くであらう。之れは都市・農村研究者の最も普通に指摘するところであつて、これを詳細に列擧する事は必ずしも難事ではない。既にソロキンは其の著作に於いて都市的農村的な諸特徴を擧げて都市・農村社會の分析をやつてゐるし、又他の研究者も各種の標識を捉へ來たつて對照的觀察を與へてゐる。例へばソロキンの場合では職業的特徴、自然的非自然的環境の特質、共同體の大きさ、人口密度、構成人口の質的異同、社會的分化と階層的構成、移動性、社會的接觸體制の相違等の八項目が擧げられ、他の論者に於いては、或ひはシヴィライゼーションとカルチュアの對照として觀ぜられ、又他の者によつては日常生活に於ける機械化的制度化的便宜の有無として觀ぜられてゐる。

是等の對照物は都市と農村との對照を明瞭に描き出す標識となり得ると共に或る程度まで兩者間の生活差を如實に説明するものでもある。同時に此の事は二つの社會が或る程度隔離してゐる事も示す。筆者は之れを住む世界の大小として對比してみた事がある。農村社會は狭い小さい世界であつて都市社會は廣い大きい世界である。其の結果、生じて來る特徴を列擧的にあげて見れば、前者に於いては生活關心が主として身邊的即斷的であるのに對して後者に於いてはそれが原則的主義的であり觀念的である。故に前者は具體的で實生活からの游離がないのに對して後者は抽象的理念的で實生活から

は一應切はなされて觀念し把握する事が出来る。故に又、前者が特殊であるに對して後者は普遍的であり、それが包擁的融通的であるのに對して前者は偏狹排他で頑迷ならざるを得ぬ。従つて前者は鄉黨的であるに對して後者は世界人的であり、拘束的なるに對して自由的、全體的なるに對して個人的であり、綜合的土地的生活的なるに對して分離的機能的であり、前者の定着固定的であるに對して後者は流動的である。従つて後者は速度的であつて前者は遲拙的である。

かうした諸對照はなほいくらも列舉し得るであらうが、茲に云ふ世界の大小とは單純にコミュニティの大小を指すのではなくして、共同生活體の大小は勿論であるが、必ずしもそれ丈でなく其の社會が他の大きな廣い社會に對して持つ交渉關係の多寡にもよるのである。郊外社會の如きは一地域共同體としては地方の小都市に比して必ずしも大きいとは云へないが後者の封鎖的孤立性なるに對して前者はそれ自體がより大なる社會との交渉綜合（大都市社會の構成分子）として存在するものであるから其の社會・生活様相は全く異つて來るのである。

此の對照は單に都市と農村とに於いて見られる許りでなく、時間的には昔と今と、場所的には農村と都市、或ひは地方小都市と大都市、乃至は大都市の下町と山の手等に於いて見られる所のものである。

然かるに近時、殊に今次戰爭以來此の對照的關係に全く倒錯的現象の起つて來た事に氣がつかねばならぬ。即ち農村が決して狭い小さい世界的でなく、都市が廣い大きい世界的でなくなつて來た事である。こゝで都市と農村との關係の現代相を觀察する事になる。

四 都市・農村關係の現代相（一）

今次戰爭の無理な遂行は早くも國內諸方面に窮厄と混亂とを惹いた。都市と農村との關係に從來見ざる様な反對現象を發生せしめたのも其の爲めである。從來都市は農村に對してあらゆる方面に於いて優位に立つてゐた。従つて吸引力の點から云へば都市は常に農村を引っぱりつけてゐた。農村は都市に引きづられてゐた。農民離村といひ都市憧憬といひ、都會の燈といひ、いづれも此の吸引力又は支配力の表現であつた。勿論都會人のうちには農村又は田園に對する愛着や自然に對する憧憬敬仰を持つてゐるものもゐた。或ひは都會生活の内部に農村風又は農民調を取り込んで満足をしてゐるものもあり、登山やキャンプ等を楽しむ事によつて田舎をよろこぶ者も尠くはなかつた。併し茲で注意しなければならぬことは、以上の、農村風農民調に對する都會人の指向は、都會人としての生活基調の上に於いての欲求又は趣味性の表現に外ならぬといふ事である。簡單に云つてしまへばそれは單なる都會人の田園趣味に外ならず、その意味に於いて一種のまぐれ氣であると共に都會生活から一時離れて瞬時樂しむの悅樂的のものに過ぎなかつた。生活の眞髓に觸れて農民的土地的なものは何も持つてゐないと云つて差支ない。それ故常に農民農村に對して彼等は都會人としての立場から欲求満足を要求する。故に農民も農村も常に都會人を悦ばせる様に純粹に農民的地であり農村的でなければならぬ。のみならず彼等は其の赴くところ常に都會生活の様式を延長させその觸手を延ばしてゆく。そして其の根元には自らを高しとして相手を貶しめてゐる。完全なる同感又は理解すら缺くといふのが眞相であつた。

それ故、地方農民が都會に出れば一時的滞在にせよ出稼又は移住にせよ、都會化する以前に於いては常に田舎者扱ひを受け迷惑視され厄介物扱ひされた。――斯くの如き態度で本來は地方人である可き地方出の人々が數十年の都會生活と都會化の裡に自分の郷里を失つて了つた事に近時になつて氣がついた事も時節柄笑止千萬と云へよう。

同時に農民の側に於いても少なからざる畏怖或ひは理由の明白でない畏敬心を都市及び都會人に對して懷いた。舊弊で變化なく固定的な狭い世界に住む農民が新奇で變つたものに對して之れ又理由なく尊敬心を持つ事は多く認めらるゝ所でさうしたものとて都會及び都會人乃至は都會的風物に對して農民は一日も二日も置くのが普通であつた。都會人は、反之斬新珍奇變化を好むにしても決してそれを尊敬もしなければ驚嘆もしない。たゞ新奇斬新の故にそれを好むといふ移り氣的に對處する丈である。農民及び農村社會の場合にはさうしたものに社會的身分的關聯が附隨して来る。

かくの如き都主鄙從の狀態が從來の都市・農村の關係であつた。之れが今度全く逆かさになつた事については、其の原因としていくつかを擧げる事が出來よう。

從來から農村及び農民を高く評價する傾向及び主張が皆無であつたワケではない。農民を實質剛健不撓不屈として之れを國の寶とした事も久しい。併し其の反面には以つて農村及び農民を自分達の思ふが儘に役立たしめ様とする動機からそれが説かれたとも解釋する事が出来る。事實、前にも一言觸れた點があるが所謂良質の勞働を地方に求め得るといふ理由で都市から工場が地方に移駐したといふ現象もある。又知識が狭くその意味に於いて無智である事から、操作する場合、農民は都會人よりも確に扱ひいゝ對象であつた。故に號令的規律の下ではたゞ服従する事を知つて「何故」の懷疑心を持

たぬ農民は指導者にとつて好個の存在であつた。同時に其の豊富なる人に生産力は軍國的人口政策の必要に合致した。かくして農村及び農民の讚美論が起る。世相が軍國的風雲急なるに及んで此の傾向は益々盛んになつた。

斯くの如き工場から農民及び農村の改良運動は必ずしも歓迎せらる可きものでない。農民がより知識的になり理性的になり懷疑的になり批判的になる。或ひはより欲求的になり文化的になつて來れば、それだけ農民は扱ひ難い存在となつて來るからである。換言すれば本當の意味に於いて持つ農民の價值自覺を出来るだけ妨げておく必要があつたのだ。故に農民は國の本なりと云つても、たゞそれだけで、依然、國の力、國の中心は中央都市にあるものとしなければならなかつた。何處までも大東京がお膝元で、國の中心で國力の源泉で、素晴らしい存在、驚異的でなければならなかつた。

かかる關係を逆倒させたものが今次の戦争であつた。其處では、既に單なる空辭としてでなく本當の意味で眞剣に人的資源の給源として農村が求められた。前線に於ける戦闘に於いても、或ひは銃後の軍需生産場裡に於いても強大なる需要が農村に向けられた。試みに數年前の新聞紙を翻いてみるがよい。其處に産業戰士、少年産業戰士に對するいと華かな讚辭激勵の章句を無數に見出すであらう。そして其の結果、是等の地方人を單純に又、自分達が國の柱であると思ひ込ましめるに到つた。

五 都市・農村關係の現代相 (二)

併しそれと同時に更に農民の價值自覺をいやが上にも高めたものは食糧生産の狀況であつた。改めて云ふまでもなく今

次戦争の完遂には軍需生産資源と共に食糧確保といふことが缺く可からざる前提であつた。殊に食糧確保といふ事には重點が置かれたと見て差支ない。茲に戦時國土計畫の發足も理由づけられる。蓋し日本國內の食糧生産力にのみ依存する事が出来ぬ以上、一方では極力その増産に努力を傾注すると共に他方では鮮満支をその基地として確保する必要がある。従つて當時の内地の國土計畫立案と並行して日滿支國土計畫立案が一應促進せしめられた。

所で緒戦の華々しい戦果と之れに續く、主として農業的な廣大なる地域の占據は戦時食糧問題に輝しい解決を與ふるかの様に見えたが其の實、此の廣大なる占領地域に互る兵站線確保の保證は初めから食糧問題に關しては期待薄であつた。何となれば茫漠たる海面を以つてつながる此の兵站線は其の當初よし敵戦力による脅威が無いとしても輸送力不足から決して萬全に頼れるものでなかつたから。故に國內自給の必要ははじめから少しも輕減されはしなかつた。のみならずはつきり云へば國內の食糧不足は既にはじまつてゐたと云つて差支ない。故に早くも南方々面の外米を作戰物資戰略物資と名づけて兵站戦力を轉用して其の輸送を試みさへした。

戦局が緊迫悪化するにつれて海上兵站線に對する破壊は全く國內自給の絶對絶命の立場に追ひ込むと共に、之れは食糧の絶對的不足となつて現はれて來た。配給量の削減から主食代用品の登場となり、更に今日に於いては配給の遅延、缺配までに立到つて敗戦後とは云へ未曾有の大危機を招來し、茲に到つて都市と農村の關係は俄然一變して從來未經験な事態を現出した。

元來平時又は豊富の時期にあつては人間慾望の必需と奢侈との區別は判然とし難い。蓋し必需はかゝる場合常に奢侈の

外皮を被ふからである。一般に必需と稱せらるゝものも此の場合には本源的必需の資質に他の何等かの資質を附加してゐる。併し一朝緊迫窮乏の時に到ると人間本來の慾望は本源的必需の資質にのみ向いて他を顧みなくなる。其處では必要不可欠のもの、あつても無くとも差支ないものとの區別が判然とする。戦時食糧逼迫の問題は正さに之れであつた。そして最も卑俗な用語によつて文化的と名づけられたものが、此の本源的必需に加裝せられたる附加的の何ものかの部分を指すとすれば、都市生活の文化性は茲に脆くも崩壊したのである。「贅澤は敵だ」と唱えられた標語は我國の戦争指導者の根性の狭少偏固を露呈してゐたかも知れないが同時に、否むしろ我國戦力の貧弱を實相的に露呈してゐたものと見る方が當つてゐる。つまり、貧弱な戦力は本源的必需をすら生活基本に於いて充足し得ないのに、どうして加裝的満悦にまで配屬する事が許されたであらうか。かくの如くして今日の主食觀念は最早米、又は米麥ではなくなつて嘗ては家畜の飼料にあてられた雑穀から諸類に及び、更に下つては何んでも口に入れられるものが主食だといふ事になつて了つた。

かくして本源的必需の生産基地としての農村は加飾生産の所在としての都市に對して著しく優越的な地位に立つた。從來の農村から都市、末端から中心への動きは逆になつて都市から農村に中心から末端への動きと變つた。かつて華かな文化を誇つた大都市の中心（普通「銀座」といふ普通名詞化した言葉で呼ばれてゐる地域）は極度に無味乾燥蕪雜な存在となつて了つて人々は機會ある毎に田舎に出かけた。買出部隊が之れである。たゞ此の事は、單に必需物資殊に食糧の絶對的不足のみに起因する事ではない。それが勿論根本原因をなしてゐる事は疑ひもないが之れに加へて計畫配給の失敗といふ事が買出部隊を盛んならしめた直接原因である。大消費地の主食配給の遅延、不足甚しき今日に於いてすら、その對策

の一つとして食糧疎開が叫ばれてゐるが、之れは食糧を（例へば空襲災害の危険から）疎開させるといふのではなくて、食糧のあり、又はありさうな所へ大消費地から少しでも多くの人間を移動せしめて其處で喰はせようといふ意味である。故に茲に食糧の有無といふ事と共に偏在といふ状態が明かに指摘されねばならぬ。

此の食糧偏在の原因を輸送力不足にのみ求めるのは必ずしも妥當ではない。勿論輸送力の不足も大きな原因の一つではある。併しそれ以上に地方生産者が進んで之れを出さぬといふ事、即ち供出をよるこぼぬといふ事、此の點に眞に大きな原因があると見なければならぬ。今次總選舉にあつて立候補者の少なからざる人々が主食（之れも前述した觀念の主食であるが）三合配給をスローガンにした。之れに對して政府關係當局ではしきりに食糧事情の數字をあげて其の實行不能を力説してゐたが、官廳數字は兎に角として實際には天下何人も二合一勺の配給米を辭退してないのに、一部の階級や地方では優に三合又はそれ以上を喰つてゐる現状なのであつた。此の事は二合一勺以上の何程かの量が配給ルートにのせられなかつた事を意味し、之れが買出し及び闇の對象となつた事を示す。

假りにさうした事態が、更に今日の恐るべき深刻な事態を生み出した基であるとして、辯明するとすれば、それでは今日食糧非常時宣言中の一策として前述の食糧疎開に應急の解決方途を求める事自體を自から否定する事になつて了ふ。要するに絶對量的不足もさる事ながら、都市・農村間の動きを逆行せしめた基は此の偏在現象にあるといふ可きである。斯くして嘗ての田舎より都會への巡禮は逆に都會から田舎への巡禮に變つた。之れ在來の價值關係の倒錯の一つに外ならぬ。

六 都市・農村關係の現状（三）

凡そ文化的なるものは一つの幅を持つてゐた。上下的にも左右的にも文化的なるものは可なり廣い幅を持つており、其處に顯著な差異が認められた。併し一度本源的な必需の線に追ひ込められると俄然此の幅は消滅した。従つて幅の内にあつて生活してゐた都會人、文化人は著しく狼狽した。そこで前述した廣い大きい世界に生活してゐた人々は、最早や主義、原則、理念の問題でなくて自分達銘々の日々の臺所食糧の問題となつて來た。彼等の話題は俄然、配給制度そのものゝ問題から自分の臺所食膳に上る配給食糧の不足貧弱を云ふ様になつた。身邊的即物的な關心へと移行して來た。此の事は以前ならば農村的な舊套的な狭い小さい世界の人々の態度であつた。こゝにも內的に都市的・農村的關係のあり方が逆立した一例がある。

反之、農村及び地方が今や大きく天下國家を論じ政治を談ずる様になつた。彼等は今迄及びもつかぬ遠い存在であつたものを身近かに感ずる様になつた。早い話が總理大臣をはじめ各種各様の大臣大官が山村漁村邊鄙な土地をおとづれて地方人の隣人となりあだかも同格の士になつた。地方人には之れが一つの驚きであると共に、よかれあしかれ自己價值への（當不當はさておき）自覺でもあつた。是等地方訪問者は口を開けば地方人の働きの如何に國家的世界的に重大なるかを訓へた。ラヂオ、新聞、雜誌、訓令、回覧いづれも此の類ならざるはない。今日から見れば正さに歪曲せられてはゐたものの、世界情勢を教へ世界史的發展を説き地方人の崇高なる働きをあます所なく昂揚した。其の結果是等地方人の視界は

豁然と開けた（實際どの程度であつたかは疑問として）。そして其處には又眞面目なる地方人をして深憂せしむる様な事態も發生して來た。例へば一時流行した挺身隊とか推進隊とかいふ組織の内に這込んで本來の生業から離れて政治面に浮動する意氣昂然たる農村青年の姿さへ見られるに到つた。

此の對照、即ち農村人が聲高く天下國家を論じてゐるのに都會の文化人、インテリが昨日の配給の乏しきを嘆じ今夕の食卓の淋しきをなげき、更に物資調達に四方に狂奔してゐるといふ、其の對照は正さに諷刺作家の好個の材題であつた。そして茲に都會人、文化人にとつては身心共に深刻極まりなき動搖が生れた。

農村に於ける此の變化を生んだものは、單に大臣、高官の勤勉なる行脚のみではない。ラヂオ、新聞、講演のみでもない。以上の事態から農村に於ける廣い世界的接觸は急速度に擴大した。食糧のある農村には陸續として都會人がつめかけた。他方、空襲に對する疎開として工場の地方分散や老幼學童その他の人員疎開は、之れに拍車をかけ、農村は正さに都會的變貌を受けるに到ると共に、都市は完全に農村の優越感に屈服してつた。

事實疎開者に於いて地方人は最も憐むべき都會人を見出した。殊に食糧事情の逼迫するにつれ、インフレの進行するにつれて地方に散つた、或ひは地方に買出しに出かける都會人の姿は、誰の眼からみてもさうであつたが、地方人からすればなほ更憫笑に値するものであつた。嘗ての優越感、矜持、豪奢は全くなく正さに喪家の狗に等しかつた。

此の時期に於ける農村人の態度が批判さるべきものであるか否かは問題があらう。食糧供出を廻つて誰が悪いかといふ事も、しかく簡單には斷定し得ないであらう。しかし農民、地方人の態度がかうした窮境に陥つた都會人を憤慨せしめ悲

奮せしめた事も事實である。茲で兩者は感情的對立となつてその關係が最も惡化してつた。此の感情的對立は相當深刻である。故にその禍根を將來に永く残すであらう。

斯くの如く都市と農村との關係の現状は全く昔と逆さになつてしまつた。その動きに於いても、自己意識に於いても、見識（表面的にせよ）に於いても。そして富と物とは嘗て都會的標識として巨大都市の生活場裡に誇示せられてゐたものが悉く地方や田舎に集つて了つた。都會人は流行語の示す様に符的存在となり、農村人は内容の充實を缺いた文化的相貌を以つて登場して來た。

六 都市・農村問題の將來への轉機

しからばかうした現状はどういふ將來に連がるであらうか。其の對立を克服する目的に於いてどういふ將來を各々は描き得るであらうか。そして其の現状との結びつけはどうあり得るであらうか。

敗戦による戦争終熄はあらゆる從來からの關係を一新して了つたし、一新せしめんとしてゐる。軍國主義的専制國家は平和主義的民主國家に變らんとしてゐる。此の大きな轉換に於いて都市・農村關係も新しき局面を得て其の問題を解決し得るであらうか。

確かにこの點で問題解決の一轉機は與へられてゐるといつていい。併しこゝで注意しなければならぬ事は、前述した都市・農村關係、殊に最近感情的對立にまで發展した最も惡化した此の關係は敗戦によつて御破算されなかつたのみならず

終戦後新に國內生活、殊に食糧生活の窮厄化が強大になると共に進行したといふのが真相である。従つて軍閥や財閥の没落の様に簡単に收戦と共に問題が消滅し去つたり、又は解決するといふワケにはならぬ。其處で此の問題の將來に就いても深甚な考慮が必要になつて來ざるを得ない。

此の問題は之れを二つに分けて考へねばならぬ。つまり現在のものと本來的のものとの二方面が併存してゐると考へねばならぬ。現在の問題とは今日の深刻なる食糧事情に現はれてゐるものであるから、之れはその緩和と殊に偏在事情の解消を以つて一應解決し得るものと考へられよう。しかし之れによつて過去に於ける都市對農村問題の解決は得られてゐないので本來的問題は依然残るワケであり、此の解決はどう求められるかを別に考へねばならない。

第一の現在の問題に於ける食糧事情の緩和に就いては食糧増産の各方途が講ぜられねばならないが、此の問題に就いては既にあらゆる方策が論及されてゐる。土地生産力の増大耕作面積の擴張から聯合軍側よりの救援は云ふ迄もなく、更に榮養學的に考究された食生活の合理化にまで及んでゐる。肥料の増産とその公正なる分配、農器具の充實、作業用品の補給等、生産力及び農民の生産意欲高昇に資すべき諸方策があらう。それらに就いて茲で細かに論議する必要はない。反之第二の偏在の問題に就いては「ものは無いのではない、有るのだ、併し均等に出廻つて來ないのだ」餓死するなら日本國民みんな餓死しよう」とかいふ叫びに示されてゐる様に食糧市場の問題、今日では配給の問題として取上げられる。勿論第一の問題と第二の問題とを無關聯に見る事は許されない。何故ならば何と云つても絶對的不足がある故に統制配給も單純な構想を以つてその完璧を期し得ないのであつて、若し之れが過剰生産にでもなる事があれば偏在の事實は立どころに

消滅するであらう。故に不足があはせて偏在の原因にもなつてゐるが、偏在の問題は、偏在の事實と之れによつて生ずる國民的感情上の問題、社會的不安の深刻なるに鑑みて別に取扱ふ必要は充分にある。

それが配給、即ち一般的に云へば市場的問題であるとすれば、如何にしたならば偏在せしめぬ様、食糧を立廻らせ得るかを考へねばならぬ。第一に偏在の事實は食糧に關して闇取引の發生を旺盛ならしめた。従つて統制的な供出制の外に之れとらんで闇市場的取引制の存在する事を確認せねばならぬ。そして正規の配給の數日又は數十日に亘る全面的な遅延を前にしては國民の大部分が兎に角、消耗しながらも切り抜け且つ耐えて來てゐるところを見ると、此の取引制の社會性も公認せられねばなるまい。さうすれば問題は價格問題だといふ事が出来る。偏在を統制配給で解消するには供出制を萬全に完成せしむる事であり、これは供出すべきものを悉く正規のルートにのせしめる事である。若し闇市場的取引制と正規の統制配給との喰違を、生活必需物資殊に必需食糧品に對する配給統制の根本原則を放棄せずに解決しようとするならば、配給制に於ける價格を引上げて闇市場的價格に近接せしむるの方法が結論として考へられる。併し此價格問題的考方は一方に於いてインフレ問題に結びついてゐると共に、食糧非常措置による新圓生活の問題に結びついてゐる。偏在の事實が正規の配給制によつて解決せず、闇市場的取引制によつて解決しないといふ事は、國民の大部分が闇價格に最早對抗し得ないといふ事實を示してゐるからである。故に價格方策による問題の解決はそれだけでは成功し得ない。

そこで更に考へられてゐる事では價格面に觸れないで之れを解決しようとするに、從來の供出方法の根本的改善といふ方法がある。此の見地から云へば在來の供出成績の不良は歴代内閣に對する不信、地方廳、農業會等に對する不信、反抗

の表現といはれてゐる。茲に所謂人民管理の問題が登場して来る。供出割當に於いて供出米の管理に於いて從來の信用信賴の出来ない當局者の介入を排除して生産者、或ひは生産者と消費者とが所謂民主的管理をやらうといふ案である。

此の提案は農村生産者の自主的組合組織の問題といひ、それらと消費者との連絡といひ、所謂民主化の線に沿ふ根本的改革を前提とするもの丈けに再興日本の現在に一つの轉機を持つものであり、且つ又重要生活必需物資の配給を統制の枠内に依然置くものとして正しく現在の考へ方といへる。同時に從來の軍及び官に對する行掛りを全く改新する措置である丈けに此の方途の成否は未知數とは云へ中心研究の第一位に置かれる可きである。殊に生産者としての農民と消費者としての都民との直結は本來的な問題の解決方面にも重要な手掛を與へるものと云つて差支ない。

七、供出を廻ぐる問題

元來、今迄の供出方法に於いて供出先の一般性従つて供出の漠然性とも云ふ可き事情が附隨してゐた。此の云ひ方はやゝ不明瞭であるが此の間の事情を説明すると次の如くである。

既に述べた様に農民の世界が比較的に狭少であつて、彼等の關心がその個人的な身邊近親的領域に限られがちである。従つて身内縁者の必要に對しては最も敏感に對應する。故に供出制に於いて正規の一般的配給ルート以外に親戚知人に對して一定限度内の贈與量を認めよとか、部落用の特別保有制を認めよとかいふ主張は食糧生産事情の窮蹙になると共に相當強く起つて來た。不正規の主食搬出についての警察的取締にもさうした抗辯が實際に少くなかつた。斯くの如くして

此の場合には供出（殊に非常時態が切迫すればする程、救援的意味を持つ供出については）誰が之れによつて救はれるのかに就いて具體的な感を持つか持たぬかといふ事が相當重要な問題となる。勿論正規の供出によれば縁者とか知人とか々直にその對象となるものではない。併し其の地方の町の人々がそれによつてかくく救はれるとか、何處の町にそれが仕向けられるとか具體感の有ると無いとは恐らく農民の供出意圖に相當な關係を持つ事と思はれる。

供出物の行先に就いてかくの如き具體感が缺けてゐたのみならず、軍部又は官廳による命令が事實、果して一般市民消費者の必要に正しく歸着したか否かは頗る疑問的であつた事も政府、軍部に對する不信と共に少くなかつた點は普ねく認められて供出意圖をはゞむ作用を強めた。

此の具體感は闇市場の取引に於いては反對的作用に變つてゐる事も注目し得る。農民が闇賣りに就いては地元人や知人や遠い縁故者などよりも全然他國人の未知人を相手にするといふ事情も屢々非難的口吻を以つて指摘されてゐる。併し此の心理は相當複雑な事情にあるものと云へる。何故かと云へば、かゝる場合の不正規なる物の取引は一方に於いては情誼的なものであると同時に他方に於いては文字通り闇行為であるからである。知人縁者に對する賣惜みは單にこれら知人からは充分な闇價格がとれないといふ打算的な考へのみから斷じ得るものでなく、むしろ逆にそんな法外（事實農民は蔬菜一貫目何十圓とかいふ値段を法外と思つてゐる）な値段では知つてゐる連中に賣れた義理ではないのである。さうかと云つて無償又は所謂適正值段でいくらでも供給するかと云へばそれにはあらゆる方面の現情が切實過ぎてゐる。其の意味で未知の他人への闇賣は或る程度まで農民のさうした情誼的責任感を解放するものと考へられる。他方闇賣は一般的な市

場關係で賣手買手とこまでも相對的である。殊に此の法外の値段が最初は買手の都會人の方から持出されたものである事も疑ない事實である。たゞ一面に就いてみてもさうした複雑な心理現象のある事を認めなければならぬ。

供出を廻つて農民に上記の具體感を與へるか否かは都市對農村の本來的問題にも關聯して興味ある問題である。蓋し農民の狭い世界を基底として考へればあくまでも具體感を活かす方法によつて供出を促進させる可きであらう。前述した生産者農民と消費者都民との直結も、此の方向に沿ふものとも云へようし、吾々は農民が再び「吾等の町」都民が「我が農村」といふ觀念や感情を取り戻すことを期待していゝかも知れない。近來の國土計畫的手法に於ける地方計畫乃至は都市鄉村計畫は各生活圈域の設定を中心として此の方向に置かれてゐると云つて差支ない。

生活圈域論は今茲に詳述する餘地を持たぬが國民各個の生活は其の定住の基地を中心に生活系統の種類によつて一定の空間的擴がりを持つものであるから、之れを正しく整頓化する事によつて生活上の不便弊害を除去し生活厚生安定を企圖する所のものである。従つて卑近には日常必要品購入を目的とする買出圈（盛り場又は商店街）から文化的高級欲求に應へる文化生活圈、或ひは通勤圈、蔬菜自給圈、勞力供給圈等の諸種の生活圈域を秩序づける事が出来る。

此の生活圈域設定は國土・地方計畫による人口・富・資本の地方分散を企圖したものであつて、圏域社會の設計により不必要にして亂雜なる流動の防止が眼目となると共に生活を地元に着せしめて構成諸因子相互間の直結を緊密にすると共に、出來得る限り相互を相識周知關係に置き併せて生活上必要な流動（交通）距離の縮少を目的としてゐるものである。故に之れを都市と農村との關係から見れば（國土計畫的には都市配置の問題）普遍的な都市と農村といふ觀念的な問

題でなくて此の町と周邊の村々の問題として提供され、吾々の町とか吾々の村とかの觀念を以つて相互に結びつく事を意味する。此の方法が在來の都市對農村關係に或る意味の改革を齎すであらう事は考へられ、従つて現在の國土復興の大事業を契機として取上げられて然かる可きものたるを失はないが、同時にその前提に於いて農村及び農民をして依然舊來の狭い世界的存在としてゐる點に一種の保守性のあるのを免れない。勿論此の保守性は從來の封建的保守性とは同一に論ぜられるものではなく、最も現代的な生活様相を分析して見ても、さうした圏域的現象は（大都市の場合でも）見出されるのであるからして一概にその理由を以つて拒否し去るべきものではない。併し新生日本についての構想中に、依然として身邊的特定對象に對してゐなければ對應せぬといふ心的狀態を墨守していゝかどうかは正さに問題と云はねばならぬ。

八 農村民文化の問題

ポツダム宣言に明示されてゐる様に吾國は全面的に民主化を促進せられてゐる。此の事は文明諸國中にあつて此の方面では最も後進的な日本にとりて決して容易な事業ではなく口頭必相表見的な民主化提唱にも拘らず實態的に非民主的な封建殘滓があまりにも多い。殊に農村方面に就いてみると殊に其の感が深い。農村及び農民の吾國に於いて占める各方面に於ける比重を考へると聯合國が日本農業及び農村の民主化を最大必要とし、重大な關心を之れに對して拂つてゐる理由は容易に理解出来る。農地の解放、小作耕作權の確立等はそれらの基礎前提であるが、扱、生活體系としての農村封建性の除去は決して容易の業ではない。聯合國が如何に之れを指導するか、否、日本政府が如何に之れを自主的積極的に促進す

るかは興味ある問題であり、農村民主化は都市對農村問題の解決の契機を現在に求めたものとしては其の性質が本來的であると共に、最も本格的に問題の解決を把握してゐるものと云へる。

農村の民主化がどの様に都市・農村の對立を解決するか、それは各方面より検討せられるであらう。中央の資本的重壓や文化的支配も全國的全般的民主化の線に沿ふて解決の方途に進むであらうし、農業經營、耕作方法の合理化、技術化も同様の効果を持つであらう。筆者は都會人が常に十全に科學的合理的だとは考へる者ではないが、此の點についての農村の現状はあまりにもかけ離れてゐる。此の技術・經營の後進性は米作を中心とする我國に於いてどう取り上げられるか、其の事自體が既に難問題であると共に之れは日本農業、惹いては日本産業そのもの、今後のあり方如何に密接な關係がある。同時に此の事は今後の世界經濟との關聯を離れて獨斷的に決定し得る問題では無い。是等の問題の究明には又別の一論文が必要とならう。

併し吾々はこれらの根本問題を離れても、一應他の角度からの民主化促進の機縁を求め得ると思ふ。それは生活改善といふ點からである。

此の面よりする民主化の手形は主として廣い意味に云つて技術、殊に生活技術的のものであるが、あらゆる方面に互つての農村・農民生活の改善は農村に新しき變化を起させる重要な契機となり得る。

その主眼點は生活水準の全面的向上であるが、日本農民が主として肉體勞働、手勞働の苛酷なる程度にまで（それが農民全家族について例外なく）虐使してゐる事實は、先づ之れを機械力、電氣力等（或ひは協同組織等を通じて）の導入利

用によつて此の過度勞働からの全面的解放が必要である。日本農業に於いて大規模な農業機械を用ひ、大規模な水利を興し、航空機その他を利用するまでには、最後までなり得ないかも知れないが、種油燈や蠟燭、ランプが電氣に變つた様に生活施設の末端一部分からでも單純なる勞働を解放せしむる方途は決して困難な事ではあるまい。勿論、その爲めには是等の便宜を受け入れる丈の經濟性が農村側に存在する事を前提とはするが、逆に此の必要が農家經濟の合理化科學化を促進するといふ行き方が此の手法（生活技術的手法）の特質なのであるから、完全に都會人と同一の生活様式に移れといふ事は其の生産活動の特質等からして不可能であつても、之れに近似した所まで持つて行く事は必ずしも不可能ではあるまい。

かくした勞働過重の負擔から農家を解放し其處に時間的、精力的餘裕を生ぜしめて、之れを文化的に利用せしむる事から農村家庭生活のあり方は漸次改變を見て來るであらう。既に都會人の地方疎開、買出人の入り込み、復員者の歸村、工場地方分散等で今の農村は舊來に比して著しく廣い世界、複雑なる世界との接觸を大にして來た。復員者はよかれ悪かれ郷里を出て軍隊なり、工場なりに於いて從來の農村的經驗、知識以外のものを學びつたのみならず生活體系の別個のものになれて來た。若し彼等がそのまゝ郷村に留まるとしたならば食に住に衣に、又教育娛樂その他の文化方面に今迄なかつた新しい要求を持ち出すであらう。故に之れに充分應へる事は、生活技術の方面よりする農村民主化について案外近距離なものではないかと思考せらるゝ。此の點で前述した國土計畫的手法としての生活圏域の設計も重要な意義を持つて來るのである。

生活様式や技術又は便益が簡単に農村の様な保守傳統の社會を改變出来るものとは思はれないかも知れぬ。併し所謂さうした文明の利器や制度風物は外部より輸入せられて文化促進の役立をした例は、明治日本の進展について例證をあげるまでもなく明白なものである。従つて此の方面への留意は今日一般に考へられてゐる以上に注目されてもいゝのではないかと思ふ。

之れによつて都市と農村との文化水準の隔差が縮まり、兩者の生活社會的體系が幾分類似化して來れば、兩者の對立乃至は對照は勢ひ削減されて來る。勿論、産業といふ特殊な生産活動とその體系、商工業の體系との間に除き得ない差と區別があるとしても、生活の上部構造及び其の表現はこれらの生活によつて近接して來ると思はれるし、社會學識、社會理解の點に於いてはなほ一層融和的なものが生れ得るのであらう。之れによつて當問題の解決の幾分の端緒を企圖する事、果して甘い夢ではないと信ずる。

附記 本稿は戦時及び戦後の生活誌的研究として各種の調査や踏査、觀察等の具體的資料をあつめて論ずる積りであつたがその機を見ざりし故、一つの作文作成に終つた事を頗る遺憾とし、其の補正を他日に期す。

西洋經濟古書解題

一千六百四十年版サー・ラッフ・マディソン著『英國の瞥見展望』

高橋 誠一郎

『三田學會雜誌』が本年七月を以て復活再刊せられたばかりでなく、新に其の編輯を擔任せられた諸君から毎號經濟古書若しくは名著解題の筆を執る可きことを命ぜられたことは私に取つて非常な喜びである。願れば、私が本誌上に於いて經濟古書に就いて語り始めたのは大正三年十一月からであつたが、明かに「解題」と銘打つて西洋經濟書の紹介に着手したのは昭和十年三月以後のことである。爾來同誌に餘白ある毎に其の埋草とし蕪雜なる解題を草し來つたのであるが、最後に記したものは同誌の休刊によつて長く公にせられるの機を失ひ、昨二十年、終戦後の十一月に至つて、漸く同學諸君の好意により小冊子として刊行せられると云ふ有様であつて、私は解題の筆を絶つの已なきを覺悟して居つた。然るに、今、本誌の再刊と共に重ねて本稿を起すの機に逢着したことは、老來益々疎懶ならんとする私に取つて正に絶好の刺戟大